

---

# 孤独の人魚姫

K 氏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独の人魚姫

### 【Nコード】

N1985Y

### 【作者名】

K氏

### 【あらすじ】

人魚の国の第八王女サーシアは、海上で偶然助けた王子に一目ぼれして、王子に会いたいがために魔女と取引する。「意思を伝える手段を持たずに見事王子の心を射止めてごらん。そうしたらおまえは完全な人間になれるし、二本の足と引き換えにもらった声も返してやるよ」そうして向かった陸の世界。運よく王子に拾われて、何とすぐさま結婚を申し込まれる。簡単に事が運び有頂天になるサーシア。けれど、結婚式の翌日になっても声は戻らなくて。

アンデルセン童話の「人魚姫」をベースにK氏が書かれたあらすじを、私いちおが預かり小説に仕立てました。そのため作者名は「K氏」といたします。上記のあらすじを更新が消化するのはしばらく先になります。

## 1、成人の儀式（前書き）

あらすじを書かれたK氏には、小説に仕立ててなろう様で公開することに許可をいただいています。

「人魚姫」をベースにしているため、溺れるシーンがあります。王子が一人不注意で船から落ちるだけでほとんど描写もできませんでしたが、ご注意ください。該当のシーンが含まれるのは二話と三話です。

主人公が16歳という年齢の割に幼いです。ですが話が進むにつれて大人になっていく予定です。

## 1、成人の儀式

プリンズランド 陸にほど近い位置に広大な領土を構える人魚の国。

数ある人魚の国の中でもっとも栄えているといわれているこの国では、この日、国をあげてのお祭りが催されていた。

プリンズランド王の末の娘、第八王女サーシアの16歳の誕生日だからだ。

16歳といえば、人魚の国では成人する歳にあたる。

だが、この日サーシアは子どものようにふくれつつらをしていた。

「つまんなーい！ わたしのためのお祝いなのに、遊べないなんて！」

駄々をこね、椅子に座ってピンク色の尾ひれで床を叩くサーシアを、世話係のリリアが苦笑してなだめた。

「サーシア様のお祝いだからこそです。サーシア様が式典や催し物に出席してくださなければ、お祝いは始まりませんわ」

リリアは、サーシアの艶やかで豊かに波打つ、ストロベリーブロンドを丁寧にくしけずる。

「父さまの誕生日の時は、お忍びで遊びに出れたのにい」

サーシアは目の前の鏡越しに、茶色の癖っ毛を頭の後ろできっちりまとめたリリアに口をとがらせる。リリアは小さくため息をついた。

「サーシア様は今日で大人になられるのですから、あまりわがままをおっしゃってはいけませんわ」

「うー……」

小さく唸り声を上げて、サーシアは黙り込む。

サーシアにとって、四歳年上のリリアは一番身近な存在だった。

末っ子で、小さい頃に母親を亡くしたため母の側仕えをしていたリ

リアの母親に育てられたが、かわいそうかわいそうと言って甘やかす母親に代わって、サーシアのわがママをたしなめてくれるのがリアだった。また、“ここまでならいいだろう”と判断したわがまには付き合ってくれた。誰よりも側にいて身の周りの世話をしてくれるリアのことをサーシアは信頼していて、リアが頑として許してくれないことは、しぶしぶながらも言うことを聞くようにしている。

ぶすくれていると、後ろのほうから声をかけられた。

「おやおや。お姫様はご機嫌斜めかい？」

「あ、セラ様……」

サーシアより先に、リアが声をかける。

セラはこの国の有力貴族の息子で、サーシアより六つ年上で幼馴染の間柄だった。サーシアの世話係や父王や兄姉以外でただ一人、ここ、サーシアの私室に入ることを許されている。

青みがかった銀髪を水流になびかせながら、青色の尾びれを緩く動かして移動し、リアの横に並んでサーシアを鏡越しにのぞき込んだ。

「せっかくの誕生日にそんなぶすくれた顔をしていたら、しあわせが逃げてしまうよ？」

サーシアは顔を赤くし、それからぷうつと頬をふくらませる。

「ぶすくれた顔なんてしてないもん！」

「ははっ、そうやって怒ってる顔がぶすくれてるっていうんだよ。

国中のみんながお祝いしてくれてるんだから、今日くらいわがママ言わずにずっと笑顔でいたら？」

「わがママなんか」

「言ってたんだろ？ サーシアがぶすくれた顔をしてる時は、たいいていリアにわがママを止められた時だ」

セラに笑顔で図星をさされて、サーシアはまたうなって黙り込むしかなくなる。

「そうそう。サーシア、君を呼びに来たんだった」

「え？ まだ“成人の儀式”が始まる時間じゃないでしょ？」

成人を迎える16歳の誕生日には、“成人の儀式”と呼ばれる儀式が行われる。それは人魚を一目でも見ようものならやつきになつて狩り出そうとする危険なニンゲンを見に行く儀式で、人魚は大人になると海の上に出てもいいことになるので、十六歳の誕生日を迎えると必ず大人と一緒に一度は見に行かなくてはならないことになっている。そうして危険な場所を教えられ、という時に見つけられてしまうかをしっかり頭に叩き込まれて、ようやく一人で海の上に行くことを許され、大人になったと認められるようになる。

海の上の世界には興味があるけど、サーシアはいろんなことを覚えなくてはならないその儀式には、始まる前からうんざりしていた。サーシアのどんよりした気分を察して、セラは苦笑する。

“成人の儀式”の前に王様が大事な話をしたいとおっしゃってるんだ」

それを聞いて、サーシアは眉間にしわを寄せた。

「えー？ それってお説教？」

「サーシアは何かお説教をされるようなことでもしたのかい？」

「してないけど……儀式のことで何かくどくど言われそう……」

サーシアは頭を抱える。

だから気付かなかった。サーシアの後ろで、セラとリリアが鏡越しに悲しげにほほえみ合っていたことに。

気が進まないまま、サーシアはセラに連れられて父王の私室に向かった。

父王はプリンズランドを長きに渡って平和的繁栄に導いてきたことから、国中の民から信頼され慕われている偉大な王だ。政を<sup>まづりごと</sup>行う時は威厳を持って厳しい処断も下すことのあるこの王も、年がいつてから授かった末の王女にはめっぽう甘く、かなりの心配性になる。忙しいためめったに会えないせい、か、会えば必ずと言っていいほど

心配だ心配だという話になる。

今回の呼び出しも、成人の儀式のことで心配になったからだろう。無茶をするな、ちゃんと教えに従えと口酸っぱく言うに違いない。

そう思っただけで父王の前まで泳いでいったサーシアは、思わぬことを言われて目を丸くした。

「え？ 結婚　？」

「そうだ。おまえも今日で大人になったことだし、成人の儀式の前に行われる宴の席で、セラとの婚約を発表しようと思う。結婚式は一カ月後だ」

「ちょ、ちよつと待って！　まだ結婚してない兄さまや姉さまもいるのに何で！？」

焦るサーシアに、父王は白髪の間じるようになった長いあごひげをなでつけながら、重々しく答えた。

「おまえは16歳にもなったのに、危なっかしくていかん。結婚をしてセラの妻としての責任を果たすようになれば、少しは落ち着けるようになるだろう」

「そんな……！」

父王の横暴に、サーシアは愕然とする。

サーシアには夢があった。

16歳になったら社交界に出られるようになる。そうしたら素敵な人と知り合っで、とびっきりの恋をしよう。

でも、結婚したら恋なんかできなくなる。

セラが結婚相手？

考えられない。セラは小さい頃からリリアと三人で遊んできた幼馴染で、兄のように慕っているけど恋愛対象にはならない。

それはきつと、セラも同じはず。

一緒に反対して……！

すがるような思いで振り返ると、セラはあきらめたような笑みを



浮かべて肩をすくめた。

「まあ、観念することだね。王様には誰も逆らえない」

それだけのことだったけど、わかってしまった。セラはサーシアのことを愛してるわけじゃないのに、王に命令されたから仕方なく結婚することにしたのだ。

怒りがふつふつと込み上げてきた。結婚を強要する父王にも、仕方なくそれに従うセラにも。

サーシアは父王に向きなおり、鈴を鳴らすような愛らしい声を大にして怒鳴った。

「絶っつ対、嫌！！！」

そして王の私室を飛び出していく。

「サーシア！」

「放っておけ」

サーシアを追いかけようとしたセラを、王は声をかけて止めた。

「そのうちにわかる。セラ、小さい頃から親しかったおまえと結婚することが、一番幸せなのだと」

セラは困ったような顔をして遠慮がちに言った。

「そうかもしれませんが、今放っておいたら危ないような気がします。サーシアは嫌なことを強要されて、それを黙って受け入れるような子じゃありません。下手をすると誕生日のお祝いのために厳重な警戒下にあるこの城から抜け出して、成人の儀式もすっぽかすかもしれませんよ？」

「あ……」

その可能性に気付かされ、普段厳めしい顔をすることで威厳を保っている王は、ぽかんと口を開け間抜け顔になる。

そうして、城内外をひっくり返すほどの大搜索が始まった。

その頃サーシアは、セラが心配した通り城を抜け出していた。小

柄なサーシアなら通れる抜け道があつて、誰にも知られていないために、嚴重な警備もやすやすとかいくぐつてしまったのだ。

絶対結婚なんかしないっ！

成人の儀式もすっぱかすつもりで、サーシアはまっすぐ上を目指して泳いでいた。海底に沿って泳いでいると、夜通し行われるお祝いの光に照らされて、すぐに見つかつてしまふ。そのため上に向かうしかなかった。

怒りに任せて泳ぎ続けたため、うつかり海の上に顔を出してしまふ。

儀式もまだ済ませてないのにと怖くなつたが、サーシアは怒りを思い出して怖さを振り払つた。

父さまがいつまでもわたしを子ども扱いするからいけないのよ！心配されなくつたつて、自分のことは自分でちゃんとできる。

一人で海の上に出たからつて、ほら、怖いことなんか何にもない。初めて見る海の上の世界は、サーシアが知らなかつた輝きに満ちていた。空に浮かぶのは、大きくてまあるい光。水面が揺れてきらきらと光を反射し、海の底よりはるか遠くまで見渡せる。

陸地の、高い崖の上にそびえ立つ城。サーシアを挟んで反対側には、海の上に大きな何かが浮かんでいる。そこから陽気な音楽が聞こえてきて、サーシアは興味を引かれて、そちらに向かつて泳ぎ始めた。

## 2、お見合いパーティー

満月の照らす、波の穏やかな夜の海。沖に出た大きな船の上では、華やかなパーティーが催されていた。ランプやろうそくで真昼のように照らされた船首側の大きな甲板で、着飾った人々が陽気な音楽を聞きながら、酒を飲み、料理をつまみ、話やダンスを楽しんでいる。

「お久しぶりです。レオ王子」

白い布地に金銀の装飾がほどこされた衣裳を身にまとった金髪の青年は、給仕からワインの入ったグラスを受け取りながら、背後を振り返った。

「これはリービツヒ卿。お久しぶりです、今宵はお楽しみいただけませんか？」

まだ1、2度しか会ったことのないレオに名前を覚えられていたのが嬉しかったのか、皺の多い四角顔の男性は相好を崩す。

「ええ。存分に楽しませていただいておりますよ。ブリタリア王国ご自慢のコーネル・クルプカ号は、沿岸諸国最大級 いや、沿岸諸国最大を誇るだけあって、このように穏やかな波ですとほとんど揺れませんな。おかげで快適です」

「リービツヒ卿」

歓談の最中、どこから女性の小さな声がかかる。

「おお、そうでした」

リービツヒ卿はにこにこしながら、背後に隠れるようにして立っていた女性に、レオの視界を空け渡した。

「こちらにおられる方は、我が国の第二王女ルビア様でして……」

「……」  
リービツヒ卿が続ける王女の紹介を、レオは閉口しながら聞き入っていた。

これで一体何人目になるか。  
パーティーが始まってから、女性を紹介されることひっきりなしだ。

周辺諸国の親睦を深める名目で開かれたパーティーだが、本当の目的はレオの妃選びにあった。

あと一カ月で二十歳になるレオは、数年前に亡くなった王に代わって国を治めている母女王に代わって、王になることが決まっている。だがブリタリア王国では、王は結婚していなくてはならないと定められている。世継ぎの決まっている中継ぎの女王ならともかく、レオは結婚をしたことがなければ世継ぎも持たない。

即位の日が間近に迫っているのに結婚相手を決められずにいるレオのために、女王や臣下の者たちがこのパーティーを用意した。

母が女王に即位した時から、レオが二十歳になった時に王の位を譲ることが決まっていた。それなのに妃が決まらないからなどという理由で即位が延期になれば、国民は失望するだろうし対外的にも体裁が悪くなる。

このパーティーが、レオに残された最後の選択の機会だった。

だが、そう自分に言い聞かせ気持ちを奮って臨んだにもかかわらず、始まって早々、その気持ちは完全にしおれてしまっていた。

長々と続く王女自慢にしびれを切らし、次の大使が声をかけてくる。

「レオ王子、お久しぶりです」

「ゲーチエル卿、お久しぶりです。先月お会いした以来でしたか？」  
これも王子の、次期国王の務め。

そう割り切って、レオはひきつりそうになる笑顔を懸命に保ちながら、令嬢たちの紹介を受け続けた。

薄暗い船尾でぐったりと手すりにもたれかかるレオに、ワインの

入ったグラスを差し出す者がいた。

「お疲れですね」

「お疲れだとわかるのなら、何故途中で助けようとは思わなかった、リヒド？」

レオはふてくされながら、差し出されたグラスを受け取る。

銀ボタンと銀の房をあしらった紺色の衣裳をまとった彼は、レオの隣に立って悪びれない笑顔を向けてきた。

「一介の従者が王子のお妃選びの邪魔などしたら、女王様や重臣の方々に叱られてしまいます。それに、わたしとしても王子には早くお相手を決めていただいて、安心させていたいただきたいのですよ」

それを言われると言い返すことはできない。

手すりに肘を突いて海面を眺めているレオに、リヒドは言い聞かせるように言った。

「相手は自分で選びたいと言った貴方に与えられた、これが最後のチャンスですよ。それをフイにしてどうするんですか？」

乳母の息子で乳兄弟として育ったリヒドは、レオが王子だから、仕えている主だからというからだけでなく、レオ個人に対して親身になってくれる。今も心配してくれているのはわかっているのだが。「じゃあ聞くが、おまえはあんな状態の場所に自分を置かれて、伴侶を選べるというのか？」

一通り紹介が終わったと思ったら、今度は紹介のあった女性たちに囲まれた。次々に話しかけられ一人ひとりに返事を返すのも大変だったのに、笑顔をやささないで互いをけん制し合う女性たちを目の当たりにして、始終背中にうすら寒いものを感じていた。なりふり構わず逃げ出さなかっただけでもほめてもらいたいものだ。

「あー……まあ、それは……」

一応の理解はあるのか、リヒドは言葉をにごす。

「結婚は、王になるための大事な責務だとわかっている。誕生日までは決断するから、もう少し待っていてくれ」

「わかりました。我が国が招いたのですから、失礼のない程度に姫

君たちのお相手をしてくださいよ。……少し休憩の時間を差し上げます。その間、王子を探してパーティー会場からも抜けだしている姫君たちのことはわたしが何とかしますから」

「助かる」

リヒドは口の端をにと上げると、板敷きの甲板をあまり音を立てないように歩いて、レオから離れていった。

再び一人になったレオは、手すりに肘を突いたまま空を見上げた。見事な満月。

ろうそくやランプで照らさずとも、十分に明るい。

穏やかな水面が月の光にちらちらとまたたいて、満天の星空に負けないくらいに輝いていた。

高台にある城からの眺めとはまた違った、美しく荘厳な光景。

めったに見ることのできない光景を目にしながらも、レオの心は晴れなかった。

何をやってるんだ、わたしは……。

自嘲を禁じえない。

ブリタリア王国の世継ぎの王子として生まれ、王になるための十分な教育を受けながら、何不自由なく育った。父王の早すぎる逝去にもかかわらず今まで王の重圧を背負わずに済んでいたのは、母クローディアが当時まだ8歳だったレオに国を背負わせるのは忍びないと言つて、中継ぎの女王になってくれたからだ。

それから12年近い月日が経つ。その間、レオは母の傍らで、王の務めの厳しさを見つめてきた。

早く母の肩の荷を降ろしてあげたい。そう思うのに、レオが結婚相手を決めることができなかったばかりに、決められた期限まで即位の日を伸ばしてしまった。

母や重臣たちに国益につながる、この国のためになる妃を選んでもらって結婚するという手もあった。だが、そうした結婚にレオは

抵抗を覚え、好きな相手を選んでいいという母の言葉に甘えて、結婚相手を決めてほしいと言い出せなかった。

結果二十歳の誕生日はあと一カ月というところまで迫り、レオの選択肢を広げるために、母や臣下の者たちに骨を折らせることとなつてしまった。加えて、夜にこのような大きな船を出して豪勢なパーティーを開くという苦勞をかけておきながら、レオは自身の望む出会いを見つけれなかった。

誰にも話したことがなかったが、レオは運命的な出会いを信じていた。目と目が合った瞬間、この人とししか考えられないというくらい激しい恋に落ちる。

そのようなものにこだわってきたから、もう後がないところまできてしまった。

今宵こそ決めよう。運命的な出会いなどという個人的な感傷を捨てて、国のためになる妃という基準で十分吟味して。

レオは、先程リヒドから受け取ったグラスに視線を落とした。

実は姫君たちから逃げたかったのは女の戦いが怖かったからだけではない。少しでも他よりリードしようとした姫君たちからワインを我先にと勧められたため、断ることに疲れつつかり飲み過ぎってしまったのだ。

酔い覚ましをしたかったこともあってここに隠れたが、いい加減戻らないと各国の大使たちの不興を買いかねないだろう。

それに喉も渴いてきた。

だが、会場にアルコールの入っていない飲み物があつただろうか？　そして手元にはワインがある。

一口だけなら酔いが増すこともなく、喉の渇きもなだまるだろう。体を起こしてワインに口をつけようとしたその時、ひっかけるようにして持っていたグラスが、するつと指先から離れた。

しまった……！

前屈みになつて掴もうとした瞬間、頭にぐらつと強いめまいを感

じる。急に頭を下げたため、酔いが急激に頭に回ったのだろう。どうやらレオ自身が思っていたより、相当酔っていたようだ。

バランスを崩したレオは手すりを乗り越えてしまい、月の光にきらきら輝く海に、まっさかさまに落ちていった。



### 3、月明かりの出会い

サーシアは、ニンゲンを必死になって浜辺に引つ張り上げた。

そのニンゲンが月を見上げている姿を、サーシアは海の上に浮かぶ大きなもの　船が作り出す真つ黒な影に隠れて見つめていた。美しいヒトだと思った。遠目であまりよくは見えていなかったけれど、それでも。

手すりにもたれかかる崩れた姿勢でありながら、それは彼の、全身からあふれる気品を損なうものではなく。端正な顔に浮かぶ物憂げな表情は、サーシアの胸を締め付けて。

だから、ニンゲンが海に落ちていくのを見て、とっさに落下地点に向けて泳ぎ出していた。

大きな音。上がる水柱。

サーシアは、落ちた勢いそのまま沈み行こうとする人間を、追いかけた。

何とか服を掴み、沈降を食い止めたサーシアは、ピンクの尾びれで力強く水を蹴って海面へと引き上げた。

海上に顔を出すと、船上は大騒ぎになっていた。

「水音がしたのはこっちか!？」

「小舟を出してください!　これは王子の靴です!　レオ王子は先程までここで休憩をなさっていたんです!」

レオ王子……この人はレオ王子と呼ばれるヒトなんだ……。

両腕に抱え込んだ意識のないヒトの顔をのぞき込み、名前を知った喜びを噛みしめる。だが、そうしていられたのも一瞬のことだった。ばしゃんという音がして、水面をたたくような音が次第に近づいてくる。

ど、どうしよう……。

サーシアは慌てた。このままではニンゲンに見つかってしまう。

ニンゲンは海の中では生きられないと聞く。だからサーシアはニンゲンが怖くなかった。見つかったら海の底に逃げればいい。そうすればニンゲンは追ってこれない。でも、自分から近づけばどうなるかくらい、サーシアにもわかっている。

助けが近づいているのだから、このニンゲンをここに置いて去ればいいと思ったのだが、サーシアが手を離すとあつという間に沈み込んでしまう。

サーシアは仕方なく、ニンゲンの服の襟足を両手で掴んで、海の中を全速力で泳ぎ出した。

「見つかったか!？」

「こつも暗くてはよく見えない! もつと明かりを!」

「落ちていないかもしれない! 船の中もお探ししろ!」

離れるにつれ、ニンゲンたちの怒号が遠ざかっていく。

船から一番近い浜　お城の真下にある小さな砂浜は、ほとんどが砂の粒でやわらかい感触さえあったが、陸地に上がるようにできていないサーシアの体を傷つけるものでしかなかった。海の中よりもずつしりと感じる体の重みに下半身を覆ううろこは傷つき、強い痛みが伴う。けれどそれに構わずサーシアは浜に這い上がり、渾身の力を込めてニンゲンを引っ張った。

乱暴ともいえるその振動が刺激になったのか。上半身が波にかからないところまで引き上げられたところで、ニンゲンは体を跳ねさせるようにして海水を吐き出し、息を吹き返す。

ニンゲンが突然動き出したことに驚いて、サーシアは襟首から手を離れた。ニンゲンが体の正面をサーシアのほうに向けようとするので、サーシアは下半身を勢いよくずって距離を取る。

体を折り曲げてむせ返っていたニンゲンは、やがて咳が落ち着き、ゆっくりと目を開けた。

「君は……」

姿を見られてしまったことにサーシアは驚き、尾ひれで砂浜を思いきり蹴って海へと飛び込んだ。

君は……。

咳込んでかすれた低い声。もう耳には残っていないはずなのに、何度頭の中で鳴り響き、心臓の鼓動を早くする。

あの声で名前を呼ばれてみたい。あのニンゲンにほほえみかけて欲しい。

サーシアが思っていた通り、美しいヒトだった。月の光に輝く金色の髪、まっすぐに高い鼻梁、男の人らしい鋭角なラインを描く頬とあご。開かれた双眸は、月の光が届かずどんな色をしていたかわからないけど、ぐったりとして弱々しいながらもまばたき一つせずまっすぐサーシアを見つめた。

あのヒトの瞳はどんな色？ かすれてない時の声は？ どんなことを好み、どんなふうに笑うの？

知りたい。けれど、それは叶わぬこと。知りたいがために近づけば、サーシアはニンゲンたちに捕らわれ、どんな目に遭わされるかわからない。

もう二度と会うことすらできないのだと思うと、サーシアの胸は張り裂けそうになった。

やみくもに泳ぎ続けて、どのくらいの時間が経ったのか。

「サーシア様！」

名を呼ばれ、腕を掴まれた。掴んだのはプリンスランド城を守る衛士を示す赤い薄衣をまとった男性の人魚だ。

「王様が大層心配なさっています。城へ戻りましょう」

サーシアにやさしく話しかけた後、衛士は周辺に向かって声を張り上げる。

「サーシア様がいらっしゃったぞ！」

その声にたくさんの人魚たちが集まってきて、サーシアを取り囲み守りながら一緒に城へ戻りはじめる。

「ご無事でよかった」

「本当に」

周囲の人々の安堵の声が城に近づくにつれどんどん多くなっていくのを、サーシアは胸の痛みに耐えることばかりに気を取られて、他人事のように耳にしていた。

サーシアを叱りつけようと玉座の間で待ちかまえていた父王は、サーシアの姿を見て怒りを忘れた。

暗がりでは確認できなかったが、四方から数を集めた夜光虫の光に照らされると、サーシアの痛々しい有様がよくわかる。やわらかい肌の上半身は細かい傷だらけで、下半身のうろこも傷がついてところどころつやを失い、小さいが血のかたまりがあちこちについている。

「何があつたのだ？」

心配のあまり王が玉座を降りてサーシアの側まで泳いできても、サーシアは口を開くことができなかった。

決まりを破って海上に出てニンゲンと会ったなんて、自由奔放なサーシアでも父に叱られるだけでは済まされない罪であることはわかってる。

そしてこの胸の痛みも、誰にも決して知られてはならないのだ。

憔悴した面持ちで固く口を閉ざすサーシアの様子から、父王はこう解釈するしかなかったのだらう。

「そんなに嫌なのなら、セラとの結婚の話はなかったことにする。」

部屋に戻って、リリアに手当てしてもらいなさい」

サーシアはかろうじて小さくうなずく。

近寄ってきたリリアに背中を押され、サーシアは玉座の間を後にした。

ぬぐった途端あらたな血をにじませる傷口に、サーシアの世話係リリアは眉をひそめた。

「うるこまではがれてしまって……どのようにしたらこんな怪我ができてしまうんですか？」

責めを含んだ言葉は、サーシアに反省を促すものにも、いつものようにサーシアをむくれさせるものにもならなかった。

「ごめんなさい……」

うなだれたまま、つぶやくように謝る。

今までに見たことのない憔悴ぶりに、リリアはいつものようにお小言を続けることはできなくなった。手を止め、横からサーシアを抱きしめる。

「お願いですから、もう二度と今回のようなことはなさらないでください。いくら捜しても見つからないと聞いて、胸が張り裂けそうでした」

胸元に回る腕に、サーシアはそつと手を添える。

リリアに悪いことをしたと想いながらも、心の大半は別のことを考えていた。

リリアの胸が張り裂けそうになったのと、わたしの胸が張り裂けそうになったのは、同じようなもの？ それとも……。

#### 4、芽生える恋

海に落ちたのは覚えている。

だが気付いた時、目の前には月の光を浴びた少女がいた。貝の胸当てと肩に薄衣を羽織っただけの半裸の姿。つぶらな瞳、小さくてもかわいらしい鼻、唇は小さくてもふつくらとしている。

レオと目が合うと、少女は怯えたように顔を引いた。

「君は……」

かろうじて一声声をかけると、少女は跳ねるようにしてレオの視界から消えた。重い頭を何とか上げて少女が消えた先に目をやると、大きな魚の尾をくねらせて、少女が海に飛び込むシルエットが見えた。

……人魚？

確認できたのはそこまでだった。泥酔し溺れかけた疲労が襲い、レオは再び昏倒した。

「レオ！ この馬鹿！ しっかりして！」

なじみのある女性の声に罵倒され、体を強く揺さぶられる。

「ダリス様、揺すってはなりません！」

この声も知っている声だ。体を揺すっていた手が離れ、手首や首筋に大きくこつこつした手が当てられる。

「レオ王子が見つかったぞ！」

「急いで女王様に報告を！」

人の声や砂を踏む音などで、周囲が騒がしくなってきた。それらの音に引きずられるようにして、意識が浮上する。

レオはうつすらと目を開けた。

「レオ！」

リヒドを押しつけるようにして、幼馴染のダリスがレオの顔をの

ぞき込んでくる。いつもは勝気な彼女が、レオと視線が合った途端、両目からははらと涙をこぼした。

「ほんとに心配したんだからあ！」

わんわん泣きながら、ダリスはレオの胸にしがみつく。

「ごめん、ダリス」

「王子、お加減はいかがですか？ 頭が痛いとか、具合が悪いなどは」

リヒドが安堵と不安の入り混じった表情をして尋ねてくる。

「少々疲労が残るくらいで、他は問題ない」

「歩けますか？」

「ああ」

そこまで言葉を交わしたところで、リヒドの表情はようやく安堵だけになった。

「船から落ちるほど酔っていたのなら、何故そう言ってくださなかったのですか。王子があのまま見つからなければ、女王様がお許しくださっても俺は自分で首をくくりましたよ」

「悪い。自分でもそこまで酔ってとは思わなかったんだ」

ダリスの細い肩に手を置いてなぐさめつつ、レオはゆっくりと体を起こす。めまいのする頭を軽く振った時、砂浜にピンク色に光る何かを見つけた。拾わなくてはならないという想いに駆られて手を伸ばす。

それは、金貨ほどの大きさもある、普通の魚ではありえないほど大きなうろこだった。

「何？」

ダリスがレオの胸元から顔を上げて、レオの手のひらをのぞき込もうとする。

「何でもない」

そう言って、さりげなくうろこを握り込んだ。

城に戻ると、知らせを受けた母女王が駆け寄ってきた。いつもはきつちりと結い上げている髪は乱れ、ドレスもどこか着崩れている感じがした。いつも身だしなみをしっかりしている人だからこそ、その様子から身だしなみに気を回せないほど心配してくれたのだとわかる。

「レオ！ レオ！ 無事だったのですね！」

母クローディアは、砂まみれのレオの両腕にすがり、どこも怪我はないかと全身を見回す。

「心配をおかけして申し訳ありません。母上」

しつかりとしたレオの声に、クローディアはほっと息をついた。

「報せを受けた時は心臓が止まるかと思いましたよ。こんなことになるなら留守居などせずあなたについていけばよかったといえ、最初から船上でパーティーを催さなければ」

言い募るクローディアを、レオは話しかけることで止める。

「母上。招待した皆様は、船上でのパーティーを楽しんでくださったっていました。それなのにわたしの不注意で水を差してしまい申し訳ありません。招待客の皆様はいかがでしたか？」

「あなたが海に落ちた後すぐに船を戻し、城内で十分なもてなしをしているわ。どなたもあなたのことを心配してらしたけれど、あなたが無事だったことをお知らせするよう指示を出しましたから、起きて無事を祈ってくださっていた方々は今頃安心してくださっていることでしょう」

「何から何までありますがうございます」

「ともかく、体の汚れを落として休みなさい。後のことはそれからです」

レオはリヒドに連れられてすぐさま自室に戻り、湯で全身の汚れを落とし夜着に着替えてベッドに入る。

「隣の部屋に控えておりますので、何かございましたらお呼びくだ



さい」

そう言つてリヒドは退室する。

ベッドに横になったレオは、傍らの窓の外を見上げた。

茜色のまだ少し残る空。朝早い時間なのだろう。この時間に見つけてくれたということは、夜通し探してくれていたのかもしれない。従者のリヒド、有力貴族の娘でレオの幼馴染でもあるダリス、母クローディア。他にも多くの者たちが搜索に奔走し、招待客をはじめとした多くの人々がレオの安否を気遣つてくれたに違いない。

全員に謝罪と礼を言つて回りたかったが、体がひどくだるくて母の言葉に甘えるしかなかった。

一休みしてから、礼を尽くそう。

そう考え眠りにつく前に、レオは手のひらに握りこんでいた物を目の前に掲げる。

普通の魚ではありえない大きさの、ピンク色の一枚のうろこ。

この存在が、あやふやだったレオの記憶を確かなものにする。

あれは人魚だった。

海流からして、船から落ちてあの浜辺に流れ着くことは考えられない。とすると、レオを助け浜辺に連れてきてくれたのはあの人魚だ。

人魚なんて伝説の生き物で、存在を信じるほうがおかしいとも思う。だが誰かに助けられなければありえなかった状況と、残された不思議なうろこに確信を得ていた。

幼い顔立ちをした、愛らしい人魚。レオが気付いたのに驚いて逃げてしまったが、できることなら呼びとめて、せめて礼の一言は言いたかった。

もう一度会いたい。会つて礼を言つて、そして……。

レオは再びうろこを握りしめ、ベッドの上に腕を降ろして目を閉じると、すぐに眠りの世界へと引きずり込まれていった。

それから三日間、レオは寝込んだ。

濡れた衣服をまとったまま一晚中過ごしたつけは、次に目覚めた時高熱という形で現れ、なかなか熱が引かなくてまたもや周囲の人々を心配させた。

そして四日目。ようやく起き出して執務室にいる母のもとを訪れたレオは、母から聞かされた話に呆然とする。

「母上、今何とおっしゃいましたか？」

執務の手を止めた母女王は、机の上に腕を置いてもう一度レオに言った。

「一カ月後のあなたの誕生日に、あなたとダリスの結婚式を行います」

「ちよつと待つてください！　ダリスとですか！？」

焦って執務机に両手を突いたレオを、母は意外そうな顔をして見上げる。

「ダリスだと何か不都合があるのですか？　身分のつり合いがとれて、幼馴染で気心が知れていて、先日あなたが行方不明になった時も、誰よりもあなたを案じ夜通しの搜索に加わり、まっさきに見付け出してくれました。誰もあの海岸で見つかるとは思わなかったのに、捜せる場所はすべてあたるべきだと主張したのもあの子です。これも愛情の成した奇跡。今まであなたがダリスを選ぼうとしなかったことが、不思議なくらいです」

「ですがわたしには　」

言いかけて、レオは口をつぐむ。

「何ですか？」

「いえ、何でもありません……」

視線を降ろし引き下がったレオに、母クローディアは常より厳しく言い放つ。

「ともかく、今から妃選びをやりなおしている時間はありません。

国民はあなたの即位を心待ちにしているのです。世継ぎの義務として、二十歳の誕生日に必ず即位しなければならないということを忘れないように」

「……はい」

レオは反論も何もできず、そのまま退室した。

廊下に出ると、壁にもたれていたダリスが近寄ってきた。

レオより二歳年下のダリスは、未婚ということあって髪は上のほうを軽くすくって結っているだけで、ドレスも娘らしく若草色を基調にしたフリルのたくさんあしらわれた華やかなものを身にまとっている。整った顔立ちをしていて目が少々つり上がっているため、美しいけれどどこか近寄りがたいきつい印象があった。

その顔立ち同様、性格も多少きつくて、思った事は何でも口にするとところは長所でもあり短所でもある。

「あなたは幼馴染だから大事だし、だから他の人に止められても夜通しの捜索に加わったけど、結婚するとなったら話は別だわ」

頭半分ほど背の低いダリスは、レオの真正面に立って顔を見上げてくる。

「あなたはわたしを愛していない。そうよね？」

挑発的に顔を近づけられ、レオは上体をわずかに反らして距離を取りながら答えた。

「ああ。わたしもおまえのことを幼馴染として大切に思うが、恋愛感情は……」

「わたしもあなたに恋愛感情はないわ」

きっぱり言い切ると、ダリスは口の端を上げ、不敵ともいえる笑みを見せる。

「わたしは愛のない結婚なんてまっぴらごめん。誕生日までの残り一カ月足らずの間に、何とかしてわたしじゃない別のお相手を見つけてね」

言いたいことだけ言って、ダリスはひらひら手を振りながら去っていった。

帰国した招待客に謝罪の手紙をしたため、搜索にあたってくれた各部署の長に感謝を述べて回った後、レオは自分が倒れていた浜辺に降りていった。

大きな岩と岩に挟まれたようなその小さな浜辺は、真っ白な砂が波によってきれいにならされ、小石は多少あるものの、他は貝殻一つ　うろこ一つ落ちていない。そしてその浜辺から見える海は遠くに地平線が見えるばかりで、波間に何も見つけることはできなかった。

背後から、従者のリヒドが遠慮がちに声をかけてくる。

「王子、あの夜に何かを失くされたのですか？」

あれは、失くしたと言えるだろう。

怯えた顔をした、愛らしい人魚。

熱にうなされていた三日間の間に、思い出したことがある。冷たい海の中で、レオは懸命に自分を抱き寄せる小さな体を感じていた。間違いない。わたしはあの娘に助けられた。

もう一度会えたら、言いたいことがある。

あの時は驚かせて悪かった。助けてくれてありがとう。

そして、そして。

ここまで考えたところで、レオの思考は止まってしまふ。

あなたを一目で好きになりましたと告げて、どうなるというのだろうか。

自分は人間、彼女は人魚。

陸で暮らすことはできないであろう彼女を妃に迎えることはできない。それに人魚の存在が人々に知られてしまったら、どんな騒ぎが起こるかわからない。不思議な姿形から、手元に置きたいと目論

む好事家たちが捕獲しようと躍起になるだろうし、人魚の肝が不老不死の妙薬になるという伝説から、人々はこぞって繰り出し海を荒らして回るようになるかもしれない。

人魚に助けられた者として、沿岸の国に生まれ海を愛する者として、海の平和が乱されることだけは避けたかった。

だから、人魚に恋をしたなどと言い出すことはできない。たとえば、レオが一番に信頼を置くリヒドであっても。

「いや、何も……」

レオは寂しげに答え、小さな砂浜を後にした。

## 5、片思い

誕生日の大脱走を境にして、サーシアの様子はがらりと変わった。言いつけを守り城で大人しくしているだけでなく、気付けば悲しうにため息をついている。

いつも元気でみんなを困らせることばかりしていたサーシアの豹変ぶりに、父王も、兄妹たちも心配して、いつもより頻繁に構おうとする。

「サーシア、城から出てはいけませんが、何でも欲しいものを取り寄せてやるぞ」

「今は何もいらないわ、父さま」

「じゃあ街で評判の劇団を呼び寄せようか？ それともサーシアはサーカス団のがいいかな？」

「兄さま、今はそんな気分じゃないの」

「お城の中全体で鬼ごっこをしましょう！ 手の空いている者たちを集めれば、かなりの数になるわよ」

「姉さま、わたしもう、鬼ごっこして遊ぶ歳じゃないのよ？」

城の中を泳いでいると誰か彼かに話しかけられてしまって疲れるので、サーシアは次第に私室にこもりがちになる。

私室にこもるようになると、サーシアの気分は更に沈んでいった。窓辺から海の上のほうを見上げ、サーシアはぼつんとつぶやく。

「海の上に出たいな……」

聞き付けたリリアは、もう何度目になるかわからないその問いに、ため息交じりに答えた。

「成人の儀式をすっぽかしてしまわれたのは、サーシア様ではありませんか。儀式は改めて次の満月の日に行われますから、それまで我慢してください。そうですね。今街にサーシア様がお好きな話を

よくする吟遊詩人が訪れているそうですよ。わたしとセラ様をお供に付けてくださるなら、外出のお許しを王様にお願ひしてみますわ」  
リリアは、サーシアが落ち込んでいるのは、城の外へ出してもらえないせいだと思い込んでいるらしい。それがいいとばかりに弾んだ声でサーシアに勧める。

そうじゃないのよ、とも言い出せず、サーシアは深いため息をついた。

サーシアを喜ばせることができなかったとわかると、リリアはしゅんとして調度品を磨く作業に戻った。

父よりも、兄弟よりも親しいリリアにでも言うわけにはいかない。海の上に出て、ニンゲンを助け、そのニンゲンに姿を見られてしまったなどとは。

それはプリンズランドのみならず、人魚全体における禁忌中の禁忌だった。人魚を見たという噂がニンゲンの中に広まると、ニンゲンはやつきになって人魚を探し出そうとするという。ヒトと同じような上半身を持ちながら、ヒトとは違う珍しい生き物を手に入れんとして。その肝は不老不死の妙薬になるなどという言い伝えさえあるらしい。

ニンゲンが人魚を探して海を荒らし回るようになれば、人魚たちは決してニンゲンたちに姿を見られないよう、ほとぼりが冷めるまで海の底でじつと息をひそめていなければならなくなる。海面近くでしか手に入らない食べ物などが手に入らなくなるのだ。

なのにサーシアは、もう一度あのニンゲンに会いたくて仕方なかった。

あれからもうすぐ三週間が経つのに、ニンゲンたちが人魚を探しているという話を聞かないからかもしれない。

見られたと思ったけど、もうろうとしていた様子だったから、もしかするとサーシアが人魚だと気付かなかったかもしれない。気付いていたとしても、忘れてしまったかもしれない。そうだとしたら

嬉しい。人魚が何人たりとも海の上に出ないよう厳戒態勢を布かれることはなくて、あのニンゲンをこっそり見に行くことができる。

でもどうしてなんだろう。何故たった一度会っただけの、しかもニンゲンなんかに、こうも会いたくなるのか。

「……ねえ、リリア。リリアは誰かに会いたくて仕方なくて、そのことで頭がいっぱいになってしまっことってある？」

何気に聞いたただけなのに、リリアは目をまんまるに見開いて、調度品を磨いていた海藻の布をほっぱり出してサーシアの側へ泳いできた。

「まあ、サーシア様！ いつの間に恋などなさったんです？」  
「え？」

思わぬことを言われ、今度はサーシアが目を丸くする。リリアは両手を組んではしゃぐように言った。

「会いたくて仕方ないという気持ちは、間違いなく恋ですわ！ その人の顔をずっと見ていたくて、いつでも側にいたくて、それで苦しくなるんです。サーシア様は恋をなさったから、苦しそうな顔をなさってたんですね！」

恋？

サーシアは呆然とする。

「お相手はどなたです？ どんな方でもサーシア様がお好きになっただけですもの。きっと王様が結婚させてくださいますわ」

「……リリア、わたしそういう相手がいるなんて、一言も言っていないんだけど」

「え？ 違うんですか？」

「気まぐれに聞いてみただけ。その様子だと、リリアにもそういう相手はいないのね」



言うだけ言って、サーシアは再び窓の外に目を向ける。

何でもない振りはしたけれど、サーシアの心臓はばくばくと鼓動を速めていた。

わたしが、あのニンゲンに恋？

そうなのかもしれない。サーシアは彼のことを思う度、胸があつたくなりしあわせな気分になった。そして側に行けないことがつらかった。

もう一度会うことができて、サーシアは人魚、彼はニンゲン、海と陸に隔てられて結ばれること叶わない。

「ちょっと寝てくるわ」

まだ側にいたリリアの横をすり抜けて、この部屋と続きになっている寝室へ向かう。

「まあ、お体の調子が悪いのですか？ 医者をお呼びしましょうか？」

追いかけてくる声に、サーシアは振り返らず答えた。

「ちょっと気分がすぐれないだけだから、寝ていれば治るわ。しばらくの間、一人でゆっくり寝かせてね」

「わかりました」

分厚く幾重にも重なった昆布のカーテンをくぐり抜け寝室に入ると、海藻のやわらかい繊維で織りあげた肌触りのいい寝具の使われた寝台にもぐりこんだ。

恋を自覚してしまった途端、悲しくて仕方なくなつて、リリアの前で泣き出さなかっただけでも上出来だと思つた。

シーツを頭からかぶり、声を殺して涙を流す。

いくら父さまが偉大でも、ニンゲンと結婚なんて無理よ……。

叶わぬ恋に、胸が張り裂けそうになる。

これはサーシアを心配してリリアが感じた痛みとは違う。

苦しくてたまらない。忘れようとしても忘れられず、あきらめようとしてもあきらめられない。

どうしたらこの痛みから逃れることができるの？

恋をするのも初めての、まだ大人になったばかりのサーシアにはわからない。

「サーシアが伏せつてるって？」

分厚いカーテン越しに、兄の声が聞こえてくる。

「ご気分がすぐれないそうです。眠れば治るからお医者をお断りになれまして、しばらくゆっくりお休みになりたいそうです」

リリアが答えると、兄はぼやくように言った。

「サーシアのお気に入りの吟遊詩人が、今街に來ていると聞いてね」

「その話は先程わたしからサーシア様に申し上げたのですが、サーシア様はため息をついてしまわれて、乗り気でいらっしやらない様子で……」

「そうか……。一体サーシアはどうしてしまったんだろう。そんなにセラとの結婚が嫌だったんだろうか？」

「そのお話でしたら、王様はとくになかったことにしてください。ただではありませんか。サーシア様を想い煩わせていることはきつと別のことです」

兄とリリアの会話はまだ続いていたけど、サーシアは考え事をするの集中した。

サーシアのお気に入りの吟遊詩人といえば、古今東西の恋物語をよく語ってくれる吟遊詩人だ。この国に伝わるおとぎ話もよく知っていて、サーシアはその中の一つが特にお気に入りだった。

ニンゲンの男に恋をして、魔女のおばあさんからニンゲンになる薬をもらって会いに行った人魚の娘の話。その恋は報われず、娘は

海の泡となって消えてしまった。

この話のことで、姉たちから脅されたことがある。

『魔女は実在するって話よ。何でも街外れにある溪谷に住んでいて、いつも妖しい薬をぐつぐつ煮込んでるんですって』

『ちっちゃいサーシアなんか、おばあさんに近づいたら薬の鍋で一緒に煮られちゃうんだから』

『レーメル様、アイレス様、やめてください！ サーシア様が興味をお持ちになって溪谷に近づいたら困ります。サーシア様、溪谷は深くて真っ暗で、何があるかわからない危険な場所ですからね。決して近づいてはいけませんよ』

そうだ。その魔女のおばあさんが見つかったら、もしかするとあのニンゲンに会いに行けるかもしれない。

そうひらめくと、サーシアの涙は引っ込んだ。

もう一度会えばそれだけで満足できてしまうかもしれない。ほんのちよつと、一晩だけニンゲンになれば……。

思いついたら、いてもたってもいられなくなった。

サーシアは夜まで寝室にこもり、リリアが今日の務めを終えて退室したのを見計らって、こっそり城を抜け出した。

真っ黒い穴がぼっかり空いているようで気味が悪かったため、リリアに言われなくても近づいたことのなかった溪谷。

サーシアは布に巻いて隠し持っていた夜光虫のランプを取り出し、それで前方を照らしながらゆっくりと下りていった。

おばあさんの家は簡単に見つかった。何しろ、真っ暗な溪谷の中で、一か所だけほのかに明るかったからだ。近づいてみれば、それは岩やぼろぼろの板切れなどを集めたあばら家だった。

「あのう、もしもし。ここは魔女のおばあさんの家でしょうか？」

「そつだよ」

中からしわがれた声が返ってくる。

……こんなに簡単に見つかっていいんだろうか。

怪しいと想って返事をためらっていると、もう一度中から声がかかった。

「ニンゲンになるための薬が欲しいんだろ？ あたしや今手が離せないんだ。勝手に入っておいで」

ますます怪しいと思ったが、ニンゲンになるための薬と聞いて、誘惑と好奇心に誘われて海藻の入り口をくぐった。

中は、外から見るとよりずっと明るかった。小さな部屋のあちこちに夜光虫のランプがはめ込まれていて、大小さまざまな壺が傾いた棚にたくさん置かれているのがよく見える。部屋の真ん中には大きな鍋があり、しわくちゃん顔をした背中のがった老婆がひしゃくで中をかきまぜていた。鍋の下からは熱湯が吹き出しているらしく、部屋の中の海水はかなり熱い。

「おまえさんがゆであがっちまわないうちに、話を済ませてしまおうかね」

「……何でわたしが、ニンゲンになるための薬を欲しがってるってわかったんですか？」

「ひえっ、ひえっ、ひえっ」

老婆は鍋の中をかき混ぜながら、不気味な笑い声を立てる。

「あたしや魔女だよ？ ここにいながら何でもわかるのさ。のう、プリンズランドの第八王女サーシア、おまえさん、ニンゲンの王子に恋をしたんだろ？」

魔女だから何でも知っているという言葉に納得しつつ、自分でもまだ信じられないでいる恋心を言い当てられて、サーシアはうろたえる。

「えっ、あの」

「それは間違いなく恋だよ。おまえさん、王子に一目ぼれしたんだ。もう一度会えば気持ち冷めるもんじゃない。それに、一時的にニンゲンになって、またもとの人魚に戻るなんていう都合のいい薬な

んざ、あたしや持っていないよ」

そんなに簡単に事が運ぶはずがないか……。

肩を落としてがっかりする。そんなサーシアに老婆は言った。

「あんたにや、がっかりしてる暇なんかないよ。早くお決め」

「な、何を……？」

戸惑うサーシアに、老婆はにたと笑う。

「王子に会いに行くのか、あきらめるのかをだよ。ニンゲンになる薬を飲めば、一生海へは戻れない。だけどここであきらめたら、あんたは一生ニンゲンになれない。あんたがいなくなったことに、城の奴らはもう気付いてるからね。すぐにここまで捜しに来るよ。前回、あんたが王子を助けた日も、ここまで捜しに来たからね。あんたが錠を破って成人の儀式の前に海の上に出て、ニンゲンを助けたことは知ってたけど、捜しに来た兵士たちには黙つていてやったよ。感謝おし」

「それはありがとう。で、ここであきらめたら一生ニンゲンになれないってどういうこと？」

「気持ちのこもってない礼だねえ。まあいいさ。想像つかないかい？ あんたがこの辺で見つかったとする。そうすると、あたしの家に用事があつたと誰だつて気付く。あんたはおとぎ話と噂を頼りにここまで来たと、親しい者たち 世話係のリリアやあんたの姉さんたちは気付くだろう。“ニンゲンになりたいだと？ 馬鹿を言うな！”と王は怒る。脱走の得意なあんたは今まで以上に嚴重に部屋に幽閉されるか、始終監視付きで暮らさなければならなくなるのさ」

幽閉か監視付き……。

サーシアはぞつとして身を震わせる。

「だが、あんたがニンゲンになるっていうなら、あたしの力で一瞬にしてあんたが王子を引き上げた浜に送ってあげるよ」

要するに、搜索の手に見つからないよう、ニンゲンになれる場所まで送ってくれるということらしい。

思案らしい思案をしないまま、サーシアは答えた。

「じゃあニンゲンになります」

老婆はあきれた顔をする。

「あんた、もうちょっと考えたらどうだい？ 二度と王や兄姉たちや、世話係のリリアと会えなくなるんだよ？」

サーシアは泣きそうになりながら言った。

「もういっぱい、いっぱい考えたもの。ニンゲンに会いたいなんて思っちゃいけない、忘れなきゃって。でも忘れられなかったの。父さまや、兄さまや姉さまやリリアに会えなくなっても、あのヒトに会いたい」

「……そうかい。あんたの覚悟はわかったよ。じゃあニンゲンになる薬をやる」

「あ、ちよつと待って」

老婆はおどろおどろしく告げて場を盛り上げようとしたのに、サーシアの能天気な声に雰囲気を挫かれる。

「さっきまで泣きそうな顔をしてたくせに、なんだっていうんだい！？」

「薬はタダじゃないでしょ？ 何が欲しいの？」

老婆は目を丸くして、それから大笑いした。

「あんたてつきり考え無しな箱入り娘かと思っただけど、物事の道理を多少はわかってるみたいだね。その通りさ。あたしも苦労して作った薬を譲るんだからね。それ相応の報酬をもらうよ。そうだね、あんたのその可愛い声をおくれでないかい？」

にやにや笑う老婆に、サーシアは小首をかしげる。

「それも不思議に思ったのよ。おとぎ話でも声を引き換えにしたってことになってるけど、おばあさんの声はしわがれてるわよね。報酬の声はどこへいったの？」

老婆は大きく目を見開き、それから大声で笑い出した。

「あつはつは！ さすがはアガートラムの娘だよ！」

「アガートラムって、父さまのこと？ 父さまを知ってるの？」

老婆はサーシアの質問に答えず、鍋から離れ、棚から小さな壺を

持ってきた。

「そうさ。あたしが本当に欲しいのはあんたの声じゃない。これは試練さ。想いを伝える手段を持たずに相手の心を射止められるか、あんたを試したいのさ。それができた時、おまえは初めて本当のニンゲンになれるし声も返してやろう。だが、想いが届かずおまえがあきらめてしまったら、その悲しみがおまえの体を溶かし海の泡に変えてしまうからね。どうだい？ それでもこの薬が欲しいかい？」

サーシアはぐくりと喉を鳴らし、そして覚悟を決める。

「それでも欲しいわ」

「よく言った！」

老婆はサーシアに壺を押しつける。

「浜に上がってから、壺の中身を全部飲み干すんだよ！ そら！

お行き！」

サーシアが壺を両手にしっかり持った途端、視界がぐるっと一変した。

……もうちょっと親切に、浜まで上げてくれたらいいじゃない。

一瞬で移動させられるなら、それぐらいの手間わけないと思うのに、波の力を借りて懸命に陸に上がりながら、サーシアは心の中でぶつぶつ文句を言う。

が、すぐに思い直した。浜に上げてもらうとしても、もし空中に移動させられてしまったら、落っこちた時すごく痛い思いをするだろう。陸に上がる苦勞と多少の痛み、落下する恐怖と痛み、どっちがいいかと言ったら、どちらかといえば前者だ。

ようやく浜に上がったサーシアは、壺を両手に持ち直して考えた。

これを飲んだら父さまや皆と二度と会えなくなる。

あのヒトの心を射止められなかったら、海の泡になってしまう。

でも、見事射止めることができれば、本当のニンゲンになれるし、声も返してもらえるのよね？ 心を射止めるっていうのは、つまり両想いになればいいってことかしら？ そつしたらもしかしてあのヒトと結婚できちゃったりして!？

「きゃー!」

サーシアは自分の都合のいい考えに、悲鳴を上げてもだえる。

あ、いけないいけない。

そつえばこの薬、気絶するほどまずいっておとぎ話にあったよ  
うな……。

サーシアの手のひらにすっぽり収まる小ささだけど、この中にい  
っぱい入ってるものを一気に飲み干すのは大変そうだ。

それでもここまで来たからには、後戻りなんかしない。

サーシアは息を止めて壺のフタを開け、鼻をつまんで口の中に壺  
の中身を流し込む。

思ったよりひどい味ではなかった。けれどひどいめまいがして、  
座った状態から仰向けに倒れてしまう。

薄れゆく意識の中、サーシアは思った。

そつえば、足の裏の話聞き忘れたわ。歩くたびに千の針で刺  
されるような痛みがあったらいやだなあ……。

きつぱり本当のことだと告げられても、ニンゲンになるのをやめ  
ようとは思わなかったけど。

そつしてサーシアの意識はぶつつりと途切れた。



## 6、波打ち際の少女

レオの誕生日まで、あと一週間に迫っていた。

「ホントに探す気があるの!？」

執務室まで押し掛けてきた有力貴族の娘であるダリスが、机に「ばんっ」と両手を突く。

「わたしとの結婚を、そこまで嫌がることないだろう」

幼馴染であり、恋愛感情でなくとも好意を持っている相手からここまで拒まれてしまうと、それなりに傷つく。

ため息交じりのレオの返答に、ダリスはただでさえつり目な目元を更につり上げた。

「嫌がりたくもなるわよ!　だってレオってば、わたしと結婚しなきゃならないかもしれないっていうのに、一度も口説こうとしないじゃない。そこまでわたしに興味のない男なんて絶っっ対に願ひ下げ」

「なるほど。一理あるな」

冷静に相槌を打ったのがいけないらしい。ダリスはキンキン声で叫ぶ。

「一理とか二理とかいう話じゃない!　あなたわかってるの!？　あと一週間の間に結婚相手を見つけないと、わたしと結婚しなくちゃならないのよ!？」

レオは両手で耳をふさいで、破壊的な声から身を守る。そして小さくため息をついた。

ここ連日ダリスから文句を言われ続け、レオは申し訳なさを通り越して辟易していた。

「そんなにわたしとの結婚が嫌なら、母上に直接そう言えばいいじゃないか。娘のようにかわいがっているおまえの言い分を聞かない母上ではない」

かねてから言いたかったことを口にする、ダリスはとたんにお

となしくなった。肩をすばめ、うつむき加減に視線をそらす。

「それはわかつてる。だからこそ言えないの。女王様はあなたに無事王位を譲るためだけに、長年玉座とこの国を守ってきたのよ。それが、あなたが結婚相手を決められないばかりに台無しになってしまったらおかしいそうじゃない」

「台無しって、大げさな」

誕生日までに結婚できなかったからといって、レオが即位できなくなるわけではない。が、ダリスはもう一度机を大きく叩いた。

「大げさなもんですか。国中にも、国外にも、あなたが二十歳の誕生日に即位するって告知してしまつてあるのよ？　なのに結婚相手が決まらないからって延期？　そんなことしたらあなたは何年も前から決められていた予定すらこなせない無能呼ばわり、そんな息子を育てたつてことで女王様の信用もがた落ちよ。結婚しないで即位するために今から昔からの決まり事を変更しようもんなら、王家は国民に恥さらし、国は他国に恥さらしだからね」

ダリスの言う通りだから、ぐうの音も出ない。即位はできる。だが、誕生日までに結婚できなかった時の代償は大きいのだ。

悲しそうに眉根を寄せてダリスは言つた。

「レオのせいであつても、国やあなた自身の名誉が損なわれることになったら、きっと女王様は心を痛められるわ。あなたの言うようにわたしは女王様にかわいがつていただいたからこそ、女王様を悲しませることはしたくないの」

そうだった。ダリスは言いたいことをずばずば言うキツいところはあるが、その本質は情の深い女性だ。だから母からダリスとの結婚を言い渡されて、最初は驚き抵抗を覚えたものの、その後はダリスと結婚してもいいかなという気持ちに傾きつつあった。にもかかわらず口説きはしなかったのだけど。どうせ好きになった女性とは結ばれない。だったら異性としてではなくとも、好意を持てる相手と結婚できればそれでいいのではないかと。

だが、そうしてなし崩しに執り行われた婚姻は、きっとダリスを

不幸にする。ダリスを不幸にしてまで王位継承者としての義務を果たすわけにはいかない。ダリスとの結婚は取りやめてもらうよう母に言おう、そう口にしようとした時、先にダリスは言った。

「ともかく！ わたしとの結婚は最終手段としてとっておいて、残り後一週間のうちにお相手を見つけてちょうだい。何ならお忍びで下街にでも行ってみなさいよ。魚よりもぴっぴちの女の子がいっぱいいるから。それとも誰かみつくるって紹介してもいいわよ？」……そうだった。ダリスは情の深い女だが、そのために自分のしあわせをあきらめるような女でもなかった。

ダリスのこのたくましさにはたまに疲労を覚える。今でも疲れるのに、結婚して始終側にいるようになったら、もっと疲れることになるだろう。

執務机に肘をついてぐったりするレオに、ダリスは言い聞かせるように静かに言った。

「沿岸諸国で肩を並べる国のない大国の王子であることは幸運なことなのよ。他国から結婚を押しつけられることも、他国にお願いして婚姻という結びつきを作る必要もない。女王様は好きな相手と結婚していいと言ってくださる。残りの一週間を無駄にしないことね。わたしは自分のしあわせをあきらめるつもりはないけど、レオ、あなたのしあわせも願っているのよ」

わたしのしあわせ、か……。

レオは自嘲気味に、心の中でつぶやいた。

部屋に閉じこもっていても出会いはあるわけないとダリスに言われ、自分の執務室から追い出された。けれど結婚相手を探しに行く気になれず、誰もいない城の真下の小さな浜辺に足を運んでしまふ。

三週間前に助けてくれた人魚のことが忘れられなくて、時間ができるとこの浜を訪れていた。

あの人魚は怯えていた。捕まえられてしまうかもしれないと恐れたのだろ。う。あんなに怯えていたのだから、きつともう姿を現さない。けど、もしかしたらまた近くまで来てくれるのではないかという期待を捨てきれない。

もう一度会いたい。会ってお礼を言つて……だからといって、恋が成就するわけではないけど。

そんなことを思いながら、いつも通り岩の影をのぞいてみて、そこでレオは息を飲んだ。

船上パーティーの翌日、レオが倒れていた岩の影に、一人の少女が横たわっていた。

赤みの強いストロベリーブロンドの髪。小さくて卵型の顔には、可愛い鼻とふつくらした小さな唇が載っている。瞳は閉じているけど、それでもとても愛らしい容貌をしているのがわかった。

レオはその愛らしさに驚いたわけではない。

めったに人の訪れのない場所に少女が横たわっていたことにも驚いたが、その愛らしい容貌に見覚えがあったからだ。

似てる。あの夜わたしを助けてくれた人魚に。

けれど少女は人魚ではなかった。ほっそりとしていて本当に歩けるのかと心配なくらいだが、ちゃんと二本の足がある。

落胆を覚えるのと同時に、レオは慌てた。かろうじて胸には貝の胸当てを着け、肩に薄い衣がかかっているが、何故か下半身は何も身につけていないのだ。

レオは目をそらしながら上着のボタンを外し始めた。

「王子、レオ王子！ どちらにいらっしゃいますか？」

リヒドが近づいてくる気配がする。

「ここにいます！ だがしばしそこで待て」

ボタンを全部外して上着を脱いだレオは、少女の上に上着をかけると側にひざまずいた。

「来ていいぞ」

リヒドに声をかけながら、レオは少女の手首を取った。温かい。脈もあるようだ。顔に手をかざしてみると、かすかに息の流れを感じる。

「その少女は？」

「ここに倒れていた。城に連れて帰って手当てをしよう」

そう言っレオは少女の方から太腿までを覆った自分の上着で少女を包み、両手に抱え上げる。

「王子、わたしが」

リヒドに任せようとして、ふと思いとどまった。

「いや、いい」

こうしたことは従者に任せるものだ。だがレオは、あの人魚に似た少女を他人の手に預けたくないと思ったのだった。

少女はとても軽く、城までの急な階段を抱えたまま昇っても、大して苦にならなかった。上着で膝まで隠しているとはいえ、素足をさらしたあられもない姿をできるだけ人に見せないように、通用口から城に入って客室の一つにこっそり少女を運び入れる。砂だらけなので浴槽の中に横たわらせると、リヒドが呼んできた年配の侍女頭に後を任せ、レオは私室に戻った。少女を抱いていたため砂だらけになった服を脱ぎ、軽く洗い流してから着替える。それが終わると、少女を運び入れた客室に向かった。

ノックして名乗ると、すぐに扉が開かれる。

「少女の様子はどうか？」

「お気づきになりました。ですが……」

「入らせてもらおう」

何かあったのか、侍女頭は言い淀む。らちがあかなかったので、侍女頭を押しつけるようにして中に入った。少女の姿は扉入ってすぐの応接室にはいなかった。寝室のほうにいるのだろう。半開き

になっていた扉を大きく開けて入ると、中にいた者たちが一様に驚き振り返る。その中に、鏡台の前に座った少女がいた。少女の目はつばらで、目をつむっていた先程よりさらに愛らしく見える。

やはり似てる……。

振り返って驚きに目を見開いた姿は、目を覚ましたレオに驚いて逃げていった人魚にますますそっくりだった。

信じがたいものを見る思いでふらり近寄っていくと、少女の髪を乾かしていた侍女たちは少女から離れてレオに頭を下げる。少女の姿をさえぎる者たちがいなくなったことではじめて、レオは少女がバスローブを身にまとっただけの姿であることに気付いた。

「し、失礼」

きびすを返そうとしたが、その前に少女は立ち上がりレオの前に立つてにつこり笑ってお辞儀をする。それから頭を上げ喉元に手を添えて口をぱくぱくさせた。

「しゃべることができないようなのです」

どうしたのかと問いかける前に、後ろからついてきた侍女頭が言った。

「君は」

本当にしゃべれないのかい？

そう尋ねようとしたその時、寝室に勢いよくダリスが駆け込んでくる。

「レオが裸の女の子を連れて帰ったですってー！？」

額に手を当て、レオはうなだれた。誰なのか、そのようにあけすけな話をダリスに伝えたのは。

「しかも素っ裸に貝の胸当てだけの恰好だったって聞いたわよ！？」  
レオの胸倉につかみかかったダリスは、ふと側にいた少女に目をやリ、それから思いつきリレオの胸倉を締めつけにかかる。

「こないたいけな女の子に、あんたは何て事をさせてんのよー！」  
「ち、違う！ わたしがしたんじゃない！」

そこに大きな咳払いが響いた。

「詳しい話はこちらで聞きましょう」

「あ……」

寝室の入り口に、こめかみに青筋を立てた母クローディアが立っていて、レオはどう誤解を解こうかとげんなりため息をついた。

難航するかと思ったけれど、説明したら案外あっさり誤解は解けた。

「そうよね。女の子に変なプレイを仕込む勇氣なんて、レオにあるわけないものね」

……誤解が解けたのはいいが、こういう信頼のされ方を喜んでいいものかどうか。そもそも、これは信頼と言っていいものかどうか。

レオとクローディアとダリスの三人で応接室のテーブルに着き、状況のすべてを説明した。話し終えたところでダリスにこのように言われてしまい、複雑な思いに駆られて渋い顔をしていると、青筋のまだ浮かぶクローディアがおもむろに口を開いた。

「つまりあなたは、崖下の小浜で見ず知らずの少女を見つけたということね？」

「そうです」

何やら尋問を受けているような気分になって神妙に答えると、クローディアは質問を重ねる。

「見つけた時点で、先程ダリスが叫んでいたような格好をしていたと」

念押しされ、空恐ろしいものを感じ冷汗の流れる思いでうなづく。クローディアはそれを見て目を伏せ、深く長いため息をついた。

「めったに人の下りてゆかない浜であなたが偶然少女を助けたのは僥倖ですが、少女の裸を見てしまったことはゆゆしき問題ね。かん口令を布きましたが、どこまで話が伝わってしまっているものやら」「ところで母上は誰からその話を聞いたのですか？」

内緒にしておけばいいものを、わざわざ伝えて面倒な話にした人物を特定して締めあげなければ気が済まない。

ふつつつとわき上がる怒りを抑えて尋ねると、クローディアは予想通りの人物の名前を挙げた。

「リヒドです」

「リヒドが報告に来た時、女王様の側にちょうどわたしもいたの」「リヒド……」

ダリスの自己申告も聞いて、レオは後ろに立つリヒドにじろつと目を向けた。レオに睨まれながらも、リヒドは何食わぬ顔で答える。「侍女頭から相談を受けたのです。少女がマニアチックな恰好をしているけど、これは王子の趣味なのかと。どうしたらいいかと問われたのですが一介の従者でしかないわたしごときが判断できることではなかったので、女王に指示を仰ぎに伺ったまでです」

リヒドの隣に立った年配の侍女頭は、胸の前で両手を握り合わせながらおろおろと口を開く。

「あ、あの。申し訳ありません。王子が発見された時からあの恰好だったとはつゆ知らず……。ああしたご趣味があるのでしたら、わたくしどもはどのようなにお仕えしたらいいのかと思ひまして。見て見ぬふりをしているだけでいいのか、何かお道具をご用意すべきなのか」

「デーナ」

レオは侍女頭の名前を呼んで言葉をさえぎった。

「わたしにそういう趣味は一切ないから、変に気を回して誰彼かまわず相談するのはやめてくれ」

「は、はい。申し訳ありません……」

「あなたにどのような趣味があるかといったことは、今は問題ではないのです。問題はあなたが少女の裸を一瞬でも見てしまったということ」

趣味云々は後で蒸し返されても困るのでここでそういった趣味はないと認識の上で話を終了してもらいたいものだったが、母の言う



ことももつともなので黙って話の続きを拝聴する。

「さきほどちらと見たところ、この国の貴族の娘ではなさそうでしたが、もし他国で身分のある者だしたら、このことを理由に結婚を迫られかねません。ダリスとの結婚が決まる前でしたらそれでもよかったのでしょうか……」

額を押さえて苦悩するクローディアをよそに、ダリスはけろっとレオに言った。

「そうよ。あの子と結婚しちやえばいいじゃない。責任も取れて一石二鳥だわ」

ダリスの言葉を聞いて、クローディアは額を押さえる手を下ろし目を見はる。

「ダリス、あなたもしかして、レオとの結婚が嫌だったの？」

「あ……それは、その……」

失言によって隠していたことを言い当てられ、ダリスは困って言葉にぐす。

そうこうしているうちに、寝室の扉が開いた。出てきたのは少女の診察をした城付きの医者だ。

「お体には特に異常は見られません。ただ、声のほうは何とも……。以前はしゃべることができていたようなので、もしかすると大きなショックを受けて、そのせいで精神的にしゃべれなくなっているのかもしれない。だとしたら一時的なものだと思いますので、そのうち回復なさいます」

医者の報告に、クローディアは毅然とした姿勢で答える。

「ご苦労でした。下がってよろしい。少女のことはあまり吹聴して回らないように」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

医者が優雅に頭を下げて退室したところで、ダリスは席を立って寝室に向かった。

「ともかく、あの子から事情を聞かないと何も始まらないわ」

レオは慌ててダリスの後を追う。

「事情を聞くといいても」

「大丈夫。任せて」

ダリスは自信ありげに言って、寝室に入ってしまった。

少女はバスローブから夜着に着替えて、寝台のヘッドボードに枕を当ててそれにもたれて体を起こしていた。

「こんにちは。ちょっと失礼するわね」

ダリスはにこやかに声をかけながら少女に近づく。寝台の端に腰かけ、少女のほうに体をひねって話しかけた。

「お腹は空いてる？」

少女はこくこくとうなずく。

「すぐお腹が空いてるの？」

大きくうなずいた少女を見て、ダリスは近くにいた侍女に声をかけた。

「この子に食事を用意してあげて。最初はお腹にやさしいものがいいわ」

「かしこまりました」

言いつけられた侍女が下がっていくのを見てから、ダリスは少女に向きなおった。

「食事が来るまでお話をしましょう。わたしはダリス。ここ、ブリタリア王国の有力貴族の娘よ。よろしくね」

少女は少し悲しそうな顔をして、喉元に手を当てて口をぱくぱくさせる。

「聞いているわ。しゃべれないんですってね。一時的なものかもしれないから、心配することはないそうよ」

そう言ってダリスがにつこり笑うと、少女はほっとしたように表情を和らげる。

ダリスがこんなに子どもを相手にするのが上手いなんて知らなかった……。

といつても、少女が本当に子どもかどうかはわからない。小柄で華奢な体つきをしていたが、貝殻に隠された胸はまあまああったような気がする。

そこまで記憶をたどったところで、レオは頬を赤らめた。すぐに目をそらしたつもりだったが、案外しっかり見ていたらしい。赤らんだ頬を誰にも見られないようにさりげなく手のひらで隠した。

「文字は書ける？ ああ、使っている文字が違うのね。見たことのない文字だけど、あなたはどこの国の人？」

ダリスが覚えのある国名を次々挙げていくが、少女は首を横に振り続ける。覚えていたすべての国名を挙げ終えたダリスは質問を変えた。

「あなたはこの城、ブリタリア城の崖下にある浜に倒れていたのだけど、何故そこで倒れていたのか覚えている？」

少女は小首をかしげ、また首を横に振った。

そうしたやり取りを繰り返しているうちに食事が運ばれてくる。

質問を切り上げ少女の食事の世話は侍女に任せて、ダリスとレオは応接室に戻った。クローディアはすでに政務に戻っている。先程のテーブルに、二人で着いた。

「要約すると、あの子はるか遠い国の生まれで、長い航海の途中嵐にあつて船が難破して、運よくあの浜にたどり着いたということになるわよね。……あなたの時といい、この辺りの海流が大きく変化したのかしら？」

「そういう報告は受けていないが」

「でもそうとでも考えなきゃおかしいわよ。二人もあの浜で助けられるなんて」

レオは黙ってダリスの言葉を聞き流した。

レオには心当たりがある。

自分を助けてくれた人魚。

あの心優しい人魚が、人に発見されてしまう危険を冒して、再び人助けをしてくれたのではないかと。

レオと同じ場所に少女を引っ張り上げること、レオに少女を助けて欲しいと言っているようにさえ思った。

「何にしてもかわいそうな話よね。近海で遭難者が他に見つかったという話も聞かないから、もしかすると助かったのはあの子だけかもしれないし。一緒の船に乗ってたっていうお父さまもお兄さまもお姉さまも……」

「……国へ帰るための手段を用意してやってもいいが、場所も名前もわからない国へ送り届けるのは不可能だし、第一帰れたとしても国に身寄りが残っていないようだし」

「これも何かの縁ね。できるだけあの子の力になってあげましょう」「そうだな」

この話が終わってしまうと、どちらからともなく口を閉ざした。無言のまま時間が過ぎるのを待っていると、寝室の扉が小さな音を立てて開く。

「お嬢様のお食事が済みました」

侍女の言葉を合図に立ち上がり、少女の元へ行く。

「お腹いっぱいになった？」

寝台の端に腰かけてダリスが尋ねると、少女はこくんとうなずく。

「それであなたの今後のことだけど、あなたはどうしたい？」

少女は何か言いたそうに口を開いたが、声が出ないことを思い出したのか喉元を押さえて悲しそうにうつむく。

「ダリス、ちよつといいか？」

場所を譲ってもらい、レオは寝台に腰掛けて少女の顔をのぞきこんだ。

見れば見るほど、あの時の人魚に似ているような気がする。だが、あの時の彼女には大きな魚の尾があった。手元に残されたピンク色

の大きなうろこが、その記憶を間違いのないものにする。そして目の前にいる少女は間違いなく人間なのだ。

だが、これこそ何かの縁なのかもしれない。

あの時の人魚とは違う、きらきらとした目でレオを見つめてくる少女に、レオはふっと笑いかけた。

「君さえよければ、わたしのお嫁さんにならないかい？」

少女のつぶらな瞳が大きく見開かれる。後ろでダリスが叫んだ。

「ちよつとレオ！ さっきのわたしの冗談を真に受けないで！」

「おまえはわたしと結婚したくなかったんじゃないのか？」

ちよつと振り返って言つてやると、ダリスは途端に口ごもる。

「それは、そうだけど……」

愛しい人はどうしたって手に入らない。なら、愛しい人に託されたのかもしれないこの少女を手元に置いていつくしめば、心の痛みも多少和らぐように思ったのだ。

「どうだろう？ わたしのプロポーズを受けてくれるかい？」

目を見開いてぼかんとしていた少女は、はっと我に返ってレオの言葉に何度もうなずく。レオの提案を喜んで受け入れてくれるようだ。

レオは笑みを深め、少女の手を取った。

「それじゃあ、これからよろしく。わたしのお嫁さん」

顔を真っ赤にする少女の目の前で、レオは少女の手の甲にキスをした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1985y/>

---

孤独の人魚姫

2011年11月21日13時20分発行